

『流された永久丸』

泉小学校読み聞かせの会 まつぼっくり

九月の終わりごろ。永久丸は、江比間の港で出航を待っています。

乗組員は、江比間村の船頭の岩吉、その弟の善吉、若見村の作蔵と、荻村の勇次郎の4人です。

船の持ち主、伊藤与市さんや家族が見送ります。与市「岩吉つあん、よろしく頼むぜん。」

善吉「おう。」

永久丸は、帆に風を受けて、ゆっくりゆっくり進んでいきます。

十一月、三重県の熊野で薪を買い、永久丸は、名古屋に着きました。

岩吉「さあ、薪を売らまい。」

売ったお金で、しょう油五十たると、食料の

大根・米・水を買って船に積み込みました。

善吉「今度は熊野で、しょう油を売るんだ。」

それ、もうひとふんばりだ！

十二月、熊野に向かう途中、だんだん風が強くなり、船がまったく進めなくなってしまうました。

2

善吉「困ったなあ、いつになったら風がやむかのん。」

岩吉「こいじゃあ、風が強くて、船が進まんぞ。」

勇次郎「風がやむまで、まこ的矢の港で待つしかない

のん。」

二十日ほどして、ようやく風がおさまりました。

岩吉「よし、船を出すぞ。」

ところがしばらく行くと・・・

波が大きくなり、船が揺れ始めました。

岩吉「いかん、風向きが変わった。岸に戻せ！」

作蔵「あーあ！舵かじがいうこときかん。」

その時、頼みの舵が根元からすっぱり折れてしまいました。

3

風がゴーゴーと唸うなっています。

作蔵「流されるぞ。」

岩吉「帆を下げるんだ！」

勇次郎「さがらん。」

善吉「しかたない！ちやっと帆柱を切れー！」

それから永久丸は、どんどん流され、わずか一週間で、八丈島沖まで行ってしまいました。

年があけて、一月五日。永久丸に希望の光が射しました。なんと、人の住む島・青ヶ島あおがしまが見えたのです。

善吉「なんとか近づけんかいのう。」

勇次郎「いかん、どんどん離れとるぞん。」

島は、だんだん小さくなり、やがて何も見えなくなりました。

見たこともない大きな白い鳥が、「キー、キー。」と頭の上で鳴いています。その声を聞いていると、ますます不安がたかまつていきました。

そして、漂流十八日目。ついに大根と水がなくなってしまうました。

勇次郎「水が飲んでえー。み・みずう」

そこで、勇次郎は、がまんができずに海水を口にいれました。

勇次郎「うわっ、どがらい。うえっ、うえっ。」

作蔵「水が飲んでえー。」

すると、天から恵の雨がポツポツと降ってきました。四人は、無我夢中で桶を並べました。桶にたまった水を飲みながら、

勇次郎 「うわー、久しぶりの水だ。」

作蔵 「うまいのん。」

善吉 「生き返ったのん。」

と、口々に言いました。

漂流して六十日目。とうとう米もなくなりまし
た。その後十日間、何も食べていません。そこへ
サメが現れました。

作蔵たちは、「サメを捕らまい。」と言いました。

岩吉は、「いかん。サメは、海の神さまのお使い
だで、捕っちゃーいかん。ばちがあたるぞ。」と
許してくれません。